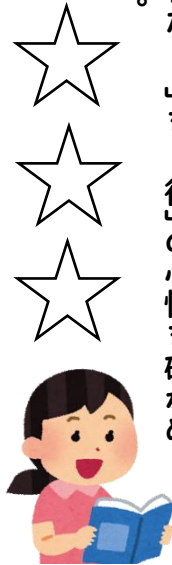


視点のちがいに着目し、心情や人物像をとらえて読み、感想を書こう

1 「律」の視点から書かれた「1」を、「律」の心情を確かめながら音読しましょう。



大切！
物語などで、語り手がその作品をどこから見て語っているかというところを「視点」といいます。

ステップ1（とらえよう）

2 「周也」の視点から書かれた「2」を読みましょう。「1」と「2」を合わせることでわかったことはどんなことですか。「1」と「2」を関連付けて、線を引きましょう。

1

2

② 今日のはなし、かんどく、是用だつて、うわばきをぬぎながら周也が言つて、くつしたにばかり空いた穴から、やんちゃやそんな親指をのぞかせた。その指をスニーカーにおさめても、周也はなかなか歩きだそうとしない。どうやら、いっしょに帰る気のようにだ。小四から同じクラスの周也。家も近いから、周也が野球チームに入るまでは、よくいっしょに登下校をしていた。なのに、今日のぼくには、周也と二人きりの帰り道が、はてしなく遠く感じられる。

① 何もなかったみたいになるまえに、何もなかったことになる。そんなあまい考えをすてたのは、校門を出てから数分後、最初の角を曲がった通りだった。どんなに必死で話題をふっても、律はうんともすんとも言わない。背中を感じる気配は冷たくなるばかり。やっぱり、律はおこっているんだ。ソリヤソリヤだ。曇り、みんなて話をしていたとき、はつきりしない律にじりじりして、つい、言わなくてもいいことを言った。軽くつつこんだつもりが、律の顔を見て、重くひびいてしまったのが分かった。まずい、と思うも、もうおそい。以降、絶対にぼくの顔を見ようとして、律のことが気になって、野球の練習を休んでまで玄関口で待ちぶせをしたのに、いざ並んで歩きだすと、気まずいあんもくにたえられず、またべらべらとよけいなことばかりしゃべっている自分がいた。

「ああ、腹へった。今日の夕飯、何かなあ。あしたの給食、何かなあ。」
「な、律。昨日の野球、見たか。」
「夏休みまで、あと何日だったっけ。」
周也の話があたりこち飛ぶのは、いつものこと。なのに、今日のぼくにはいっけな。まるでなんにもなかったみたい。周也はふだんと変わらない。ぼくだけがあのことを引きずっているみたいで、一歩前を行く細色のパーカーが、どんなにくらしく見えてくる。

「この前、給食でプリンが出てから、もうずいぶんたつよな。」
「おし歯が自然に治ればなあ。」
「山田んちの姉ちゃん、一輪車が得意なの、知ってたか。」
何を言っても、背中こしに聞こえてくるのは、さえない足音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

今日の昼休み、友達五人でしゃべっているうちに、「どっちが好き。って話になった。『海と山』は、『夏と冬』は、『ラーメンとカレー』は、『歯ブラシのかたいのとやわらかいの』は、——みんなて順に質問を出し合い、「海」、「海」、「山」、「海」と、ぼんぼん答えていく。そのテンポに、ぼくだけついていけない。『どっちかなあ』とか、「どっちもかな」とか、「一人でここによ言っていたら、周也が愚にいらつた目でぼくをにらんだんだ。」
「どっちも好きってのは、どっちも好きじゃないの、いっしょじゃないの。」

「ふいに母親の小言が頭をかすめたのは、下校中の人かげがあつちへこつちへ校分かれて、道がすいてきたころだった。」
「周也。あなた、おしやべりなくせて、どうして会話のキャッチボールができないの。会話っていうのは、相手の言葉を受け止めて、それをきちんと投げ返すことよ。あなたは一人でぼんぼん球を放っているだけで、それじゃ、ピンポンの壁打ちといっしょ。」

③ 返事をしないぼくに白けたのが、周也の口数もしだいに減って、大通りの歩道橋をわたるころには、二人してすっかりだまりこんでいた。階段をのぼる周也と、ぼくとの間に、きよりが開く。広がる。ここ一年でぐんと高くなった頭の位置。たくましくなつた足どり。ぼくより半年早く生まれた周也は、これからもずっと、どんなこともテンポよく乗りこえて、ぐんぐん前へ進んでいくんだろう。

③ でも、いい球って、どんなのだろう。考えたときに、舌が止まった。何も言えない。言葉が出ない。どうしよう。あわてるほどにぼくの口は動かなくなつて、逆に、足は律からにげるようにスピードを増していく。

「実は」を使って書いてみよう。

① 実は、周也はわざとふだんどおりにして、必死で話しかけている。あせっている。

② 実は、周也は律のことを待ちぶせするために練習を休んだ。

③ 実は、周也は自分の言葉が軽いことに悩み、言葉が出なくなつてしまつた。

はあ。声にならないため息が、ぼくの口からこぼれて、足元のかげにとけていく。どうして、ぼく、すぐに立ち止まっちゃうんだらう。思っていることが、ななて言えないんだらう。④ ぼくは海のこんなところが好きだ。山のこんなところが好きだ。その「こんな」をうまく言葉にできなかったら、周也とちやんとかたを並べて、歩いていけるのかな。「どっちも好き」と「どっちも好きじゃない」がいっしょなら、「言えなかったこと」と「なかったこと」もいっしょになっちゃうのかな。考えるほどに、みぞおちの辺りが重くなる。市立公園内の遊歩道にさしかかったころには、ぼくは周也に三歩以上もおくれをとっていた。もうだめだ、追いつけない。あきらめの境地でぼくは天をおおいだ。信じがたいものを見たのは、そのときだった。

空一面からシャワーの水が降ってきた。もちろん、そんなわけではない。なのに、なぜだかどっさにプールの後で浴びるシャワーがうかんだのは、公園の新緑がふりまく初夏のにおいのせいかもしれない。⑤ 「うおっ」。

「何これ」。

頭に、顔に、体中に打ちつける水滴を雨と認めるのには、少し時間がかかった。晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。ぼくと周也はむやみにじたばたし、意味もなくとんだりはねたりして、またたく間に天気雨が通り過ぎていくと、たがいのぬれた頭を指さし合って笑った。

本当に、あつというまのことだったんだ。ざざっと水が降ってきて、何かを洗い流した。周也の鼻どった前がみがべたつたのがゆかいで、ぼくはさんざん腹をかえ、気がつくど、みぞおちの異物が消えてきた。

単純すぎる自分がはずかしくなったのは、笑いの大波が引いてからだ。うっかりはしゃいだばつた悪さをかくすように、ぼくはすつと目をふせた。アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。そのまぶしさに背中をおされるように、今だ、と思った。今、言わなきゃ、きつと二度と言えない。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」
勇氣をふりしぼったわりには、しどろもどろのたよりない声が出た。
「ほんとに両方、好きなんだ。」
周也はしばしばたきを止めて、まじまじとぼくの顔を見つめ、それから、こっくりうなずいた。周也にしてはめずらしく言葉がない。なのに、分かってもらえた気がした。
「行こっか。」
「うん。」
ぬれた地面にさつきよりも軽快な足音をききながら、ぼくたちはまた歩きだした。

無言のまま歩道をわたった先には、しかも、市立公園が待ち受けていた。道の両側から木々のこずえがたれこめた通り道。人声も、車の音も、工事の騒音も聞こえない緑のトンネル。ぼくはこの静けさが大好きだった。

④ 正確にいうと、だれかといるときにちんもくが苦手だ。たちまち、それと落ちて着きまなくす。何か言わなきゃってあせる。野球チームに入る前、律とよくいっしょに帰っていたころも、ぼくはこの公園を通りかかると、しんとした空気をかきまぜるみたいに、ピンポン球を乱打せずにいらなかった。

⑤ 律のほうはちんもくなんてちつとも気にせず、いつだって、マイペースなものであったけど。そつと後ろをふり返ると、やっぱり、今日も律はおつとりと一歩一歩をききながら、まぶしげに目を細め、木もれ目をふりあおぐしぐさにも、よゆうが見てとれる。ぼくにはない落着きっぷりに見入っていると、とつぜん、律の両目が大きく見開かれた。

なんだ、と思っ間もなく、ぼくのほおに最初の一滴が当たった。大つぶの水玉がみるみる地面をおおっていく。天気雨一瞬では分かっていながらも、ピンポン球のことばかり考えていたせい、空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目には一しゆん、無数の白い球みたいにうつったんだ。

ぼくがむだに放った球の連撃。⑤ 「うおっ」と思わずとび上がった。後ろからも「何これ」と律の声して、ぼくたちは全身に雨を浴びながら、しばらくの間ばたばたと暴れまわった。はね上がる水しぶき。びしょぬれのくつ。たがいのあわてっぷり。何もかもがむしようにおかしくて、雨が通りすぎるなり、笑いがあふれた。律もいっしょに笑ってくれたのがうれしくて、ぼくはことさらに大声をはり上げた。

はつとしたのは、爆発的な笑いが去った後、律が息にひとみを険しくしてつぶやいたときだ。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。ほんとに両方、好きなんだ。」

たしかに、そうだ。晴れがいいけど、こんな雨なら大かかげい。どっちも好きってこともある。心で賛成しながらも、ぼくはどっさにそれを言葉にできなかった。こんなときにかぎって口が動かず、できたのは、だまっとうなずくだけ。なのに、なぜだか律は雨上がりみたいなのがにおにもどって、ぼくにうなずき返したんだ。

「行こっか。」
「うん。」
しめった土のにおいがたどようトンネルを、律と並んで再び歩きだしながら、ひよつとして——と、ぼくは思った。投げそこった。でも、ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

「1」と「2」を合わせることでわかったこと

④ 実は、周也はだれかといるときにちんもくが苦手だ、しんとした空気をかきまぜるみたいに、ピンポン玉を乱打してしまった。

⑤ 実は、律はよゆうではなく、周也に追いつけないあきらめの境地で天をおおいだ。

解答は例です。
参考にして、
考えてみてく
ださい。